

### 「インド学」 徳永宗雄

**徳永**：京大文学部附属の羽田記念館（内陸アジア研究施設）から何か話をするようにということで、先日、「電子化時代の文献学」について最近考えていることについて話してきました。

**上山**：それはどういう話ですか。

**徳永**：結論からいいますと、グーテンベルク以来の活字ないし書籍中心の文化はあと20年位でなくなるのではないかということです。電子技術が進んで、毎日電子テキストを使って仕事をしていると、その感を強くします。書籍のおかげでわれわれの研究もここまで発展してきたのですが、書籍の弊害というものも考える時期にきているのではないかと思っています。書籍の弊害の最たるものはテキストを文字で固定してしまうことです。たとえば、インド古典哲学体系の時代にシャンカラ（8世紀前半）という有名なヴェーダーンタ学者がいますが、彼の頭の中には本は並んでいなかったはずで、彼の思想は生き物のように常に姿を変えて成長を続けていたに違いありません。それを固定すると彼の思想そのものが死んでしまいます。シャンカラの著作に、たとえばヴェーダーンタ学派の根本経典『ブラフマースートラ』に対する註釈書がありますが、このテキストは、生成・進化する「シャンカラの世界」のある段階のかたちを、いわばホルマリソに仕上げにしたものです。にもかかわらず、一旦それが本になると、われわれは、そこにあたかも不変のテキストが存在するかのような錯覚にとらわれてしまいます。書籍のもう一つの弊害は、テキストとテキストを分断してしまうことです。シャンカラの『ブラフマースートラ註』は彼のウパニシャッドに対する註釈や『ギター註』、さらには様々な古層のウパニシャッドや他学派の論書と密接に関連していますが、『ブラフマースートラ註』という一つの本として見せられると、それがまるで独立して

存在するかのような錯覚に陥ります。過去二世紀のインド学は要素還元主義の立場から行われてきましたが、このような人文系要素還元主義の背景には書籍中心の文化があると、私は考えています。近年急速に発達しつつある電子技術は、このような従来の文献学の方法論を根本的に変えてしまう可能性があります。ただし、テキストを一字一句厳密に読むという文献学の原則は、今後とも変わることはありません。

**上山**：今、例に出されたシャンカラというヴェーダーンタの思想家には本のイメージはなかったのですか。

**徳永**：文字にされていたかどうかは別にして、彼に、本つまり一定のサイズの固定されたテキストのイメージがなかったわけではありません。彼は註釈の中で頻繁にシュルティ（「天啓聖典」）を引用しています。しかし、その際言及されるのは、本としてのシュルティではなくシュルティの中の特定のパッセージであることが多いのです。つまり、彼の頭の中では『ブラフマースートラ』の特定のスートラがあるシュルティのパッセージと文献横断的につながっており、それがまた、他の文献のある個所と結びついている。そのようなつながりの総体が「シャンカラの世界」を構成しているということです。これは、インターネットのホームページのリンクから構成されるWebに近いといえます。シャンカラの個々の著作が先ず先に存在し、それらの著作の総体として「シャンカラの世界」が成り立っていると考えるのは、彼の世界をレンガ造りの家のように見ていることになります。彼の世界はむしろ増殖しつづける神経組織のようなものであり、彼の著作は、神経組織の中で現れては消えるニューロンを抽出して固定したものと見るのが正しいでしょう。

また、インドでは三千年もの間、聖典は文字ではなく音声で伝承されてきました、このことも電子テキストが

普及した現代の人間にとって興味深い事実です。といいますが、電子テキストも音声テキストも、floating text という点で共通性があるからからです。

**上山：**インドで、テキストが本に化け出したのはいつ頃からですか。

**徳永：**政治・行政、司法、商取引の世界では紀元前はかなり古い時代から文字テキストが使われていたことは間違いありません。アショーク王の碑文がよい例ですね。これに対して、『リグヴェーダ本集』などの聖典は、特定のバラモンによって現在まで音声で伝承されています。実際、インドでそのようなバラモンに会って、『リグヴェーダ本集』の朗唱を聞いたことがあります。インドでは、聖典は原則として暗記しなければなりません。つまり、音声で伝承しなければなりません。活字化されたテキストはことばの死骸に他ならないというわけです。しかし、バラモン教の圏内でも紀元後数世紀以降になると一部の宗教テキストが文字化されたように思われます。その頃に編纂されたブラーナという文献に、プスタカブージャー（「本の崇拜」）という言葉が出てきますから。さらに、十三世紀以降イスラーム文化の影響が強まるのと平行して、ヒンドゥー教聖典の文字化が加速されたものと思われます。

**上山：**イスラームにはそういう伝統があるわけですか。

**徳永：**以前、ヒンドゥー教とイスラーム教が融合して成立したシク教の本山ハルマンダル・サーヒブ、通称ゴールデン・テンプル（「黄金寺院」）に行ったことがあります。パンジャブ州のアムリツツアルにあります。その寺院の本殿には、この派の聖典『グル・グラント・サーヒブ』が御座の上に祀られていました。そして、両側から扇風機が風を送っている。（笑）。インドは暑いですから。伝統インドのことしか知らなかった私には、カルチャーショックでした。

**上山：**それはひどく対称的なわけですね、インドとイスラーム世界は。

**徳永：**そうですね。それはまた、インドと中国との違いでもあります。

**上山：**中国もまた、文字を大事にしますよね。

**徳永：**ヴェーダ時代まで念頭に入れて考えますと、イン

ドでは視覚より聴覚による芸術ないしは技巧がより長い歴史を持っています。インド音楽の起源はおそらく紀元前10世紀頃まで遡りますが、視覚芸術としての絵画や壁画は、専門家によりますと早くて前3世紀頃、礼拝用の彫刻は前1世紀頃から製作され始めたということです。しかし、インドで視覚芸術が本格的に発達するのは紀元後になってからになります。後2世紀頃にはガンダーラ地方やマトゥラーで仏像が作り始められ、5世紀中葉にはグプタ朝（320頃 550頃）の下で洗練された純インド的仏像彫刻が完成します。また、同じ頃にアジャンター窟院の開掘（第二期）が行われます。当時、民間でも絵画のようなものが普及していたように思われます。たとえば、カーリダーサ（4世紀後半 5世紀前半）の『シャクンタラー』に、苦行林の女性たちが絵について話をする場面が出てきます。8世紀後半になりますと、ラーシュトラクータ朝下で有名なエローラのカイラーサナータ寺院が建立され、10世紀頃から、カジュラホーや南インドの各地で壮大な寺院群が造られるようになります。さらに下って、十数世紀頃になりますと、イスラーム文化の影響で、ミニアチュアのような精細な絵画、芸術作品として楽しむための視覚芸術が普及してきます。

**上山：**インド人たちが大変珍重している細密画は、確かにイスラーム的なものですね。

**徳永：**これに対して、インド音楽の起源はヴェーダ時代まで遡ります。ヴェーダ祭式場でサーマヴェーダ系の祭官が一定の旋律にのせてうたう歌詠がインド音楽の始まりと考えられます。

**上山：**岩波講座東洋思想の『インド思想』の中で、徳永さんはインド思想史の全体をヴェーダ時代、叙事詩の時代、タントリズムの時代という風に分けていらっしゃる。そのなかで、僕はさしあたりタントリズムに非常に興味がある。日本が、中国を仲立ちにしてインドから仏教を体系的に取り入れ始めたのは奈良時代ですが、日本人が、わりとオリジナルに、仏教を取り入れていくのはやはり空海・最澄のあたりからです。その頃からタントリズムがどっと入ってきたわけですね。先に申しました『インド思想』に高島淳さんがタントリズムについて論じておられる。それを見る限りでは、空海の密教思想はインドのタントリズムの基本的構図に非常によく似ているんですね。ここまで似たらヒンドゥー教のところに源泉を求めていかないといけない。仏教の流れのなかで小乗から大乘、密教と発達したというだけでは、密教は理解できないという印象を受けました。

**徳永**：タントリズムというのは、ヒンドゥー教のコアにあたる思想です。タントリズムをどう定義するか、それは人によって異なると思いますが、私の考えでは、一つには男性原理と女性原理の結合を究極の目標とすること、もう一つには、その結合を実現する上でマントラの役割を重要する、つまり、言葉の神秘主義を強調する点が挙げられます。

**上山**：僕がタントリズムの話を出したのは、徳永さんが始めにインドでは音声としてのことばを重視するということをいわれたので、密教でいうところの真言や陀羅尼もヒンドゥイズムの根幹に触れるものではないのかという気がしたからです。

**徳永**：タントリズムという大きな流れのなかでインド思想史を眺めると、仏陀やウパニシャッドの思想家が現れた紀元前数世紀のインドは、思想史上特異な時代であったことが分かります。

**上山**：特異というのは、インド的ではなかったということ？

**徳永**：そういう言い方は出来ませんが、インドには大きく、一元論の流れと二元論の流れがあります。ヴェーダ時代の文献はどれも多かれ少なかれヴェーダ祭式と関係をもっていますが、このヴェーダ祭式の思想は二元論を前提としております。世界は始まりにおいて円満であった。例えていいますと、器の中に水（エネルギー）がいっぱい満たされて完全な状態にあったわけです。しかし、時間が経つとそのエネルギーが失われていく、つまり、器と中身が分れていきます。ヴェーダ祭式は、器から出てしまったエネルギーを元の器に戻すためのテクノロジーなんですね。器を男性原理とすると、中身（エネルギー＝シャクティ）が女性原理にあたります。ところが、そのような思想と平行して、紀元前数世紀に、シュラマナの伝統、出家者の伝統が思想史の舞台に登場してきます。その発端は『リグヴェーダ』の新層部分にすでに現れているのですが。彼らシュラマナは一元論的な思惟方法を持っていました。ヴェーダ祭式の二元論では、世俗的繁栄を達成し、長生きをし、子孫を残し社会を安定させることができますが、そういった繁栄も時間が経てばなくなっていきます。時間というものは酷なもので、いくらエネルギーを元の器に戻してもまた前と同じ祭式をやりなおさなければなりません。これでは問題の解決にはならず、再生を繰り返しているにすぎません。最終的に問題を解決するには、再生の繰り返し、つまり、輪

廻から自由にならなければなりません。解脱して、世界が二元に分化する前の状態に戻らなければならない。このように考えて、ウパニシャッドの思想家やブッダ、ジナは、解脱を目標とする新しい宗教運動を起したわけです。

**上山**：やっぱり、そういう位置づけをしてもらったほうがいいな。大きな二つの流れがあって、祭式を商売にしているバラモンの二元論を一挙に乗り越えようとするシュラマナの流れ、そのような流れの中で仏教が誕生したということ、こういう視点で仏教を見直す必要がありますね。日本では、インドというとまず仏教が連想されやすいのですが、インド思想史全体から見ると、仏教はむしろ特異な時代に誕生した思想なんだということですね。

**徳永**：今述べた一元論と二元論が紀元後に統合されて出てくるのがタントリズムです。それは、ヴェーダ時代の祭式思想の有神論的復活と見ることができます。それら二つの流れが合流していますので、タントリストは、聖の世界と俗の世界は一体であると同時に別であると主張します。これに対して、ヴェーダーンタ学派ではブラフマン一元論が大前提になっています。タントラの思想は時代とともに盛んになっていきますので、ヴェーダーンタ学者もそれを無視できなくなり、シャンカラ以降、いろんなヴェーダーンタ学者が異なった立場から二元一元論を整合的に説明する新しい学説を提唱するようになります。ヴェーダーンタ学派の歴史はタントリズムとの相剋の歴史であるといっても過言ではありません。

**上山**：まさしくその二元一元は、空海がまともに取り組んでいる問題点でもあるんですね。お話を承って非常にヒンドゥー的だなあっていう感じがしたのは、大日さんっていうご本尊、あれはヴェーダの神様に似てますね。ヴィシュヌ派なんかの神様となんとなく似た人格神ですね。空海は生きたまま神になることを即身成仏というんです。即身成仏というのは大乘仏教の線から出てきにくいと思うんですが、それが突然出てくるので日本の仏教界は戸惑うんです。密教はヒンドゥー教の側から説明してもらった方がよく分かる点があるように思います。仏教の伝統に無理に乗せようとしなくて、大きなインド思想の流れの中で見直してみる必要があるのではないかと思います。印象を強く受けました。

**徳永**：タントリズムはインド思想そのものですね。

**上山**：空海が中国から持って帰ってきたお経や仏具など

のリストに『請来目録』というのがあるでしょう。その中に梵本四十二巻のリストがあり、それを空海は真言僧侶の必読文献として挙げている。その文献が梵字もしくは悉曇文字で書かれているので、その文字の学習のために悉曇学の伝統が生まれ、文字と同時にサンスクリットの音声学も日本に入ってきて、その流れのなかで江戸時代に五十音表が整えられるようになる。このように、いろんなかたちでヒンドゥーの文化がタントラと一緒に日本に入ってきていることを考えると、広いインド思想の中で日本の密教をもう一回捉え直す必要がありそうですね。

**徳永：**先ほど先生が生きたまま神になるとおっしゃいました。そのためにはいろいろ儀礼がありえますが、やはり一番重要なのはマントラのエネルギーだと思います。マントラはサンスクリットの音声からなっており、その音声は梵字もしくは悉曇文字で表記されます。従って、その文字の伝承が密教で必須の課題となるのは理解できるように思います。

**上山：**空海はまさしくそう書いてるんです。今日お話ししながら痛感したのは、インド思想あるいはインド文明は世界の文明の中で独特な位置を占めているということです。一つには、言葉がヨーロッパの言葉の親類だということ。それから、メソポタミアを中心にした文明がインドにきていたとか、西からアリア人が入ってくるとか、西側との関係が非常に強いということ。ところが、インドの宗教思想は、東南アジア、中国、朝鮮、日本という東アジアの国々へずっと広がっている。こういう意味で、インド文明は東西文明の対話の場を用意しているのではないかと思います。

**徳永：**インド文明も西洋の文明も、日本人は客観的に見つめることができる立場にあります。また実際、これらの文明の研究も日本ではよく進んでいます。加えて、中国など東アジアの研究では他のどの国にも負けない豊富な研究実績があります。このようなわけで、日本は、東西各地の文明を総合的に研究する上で最も適した環境にあることは間違いありません。文化面で日本が世界に貢献できるとすれば、それはまさに、このような環境を生かして、滅びつつある民族ないしは世界の知的文化遺産を保存・修復・研究して古代人の智慧を現在に生かすとともに、それを次世代の人類に継承していくことにあると考えています。

**上山：**今日は、どうも、いろいろと有難うございました。

